

# JAMの主張

## 「村田きょうこ」を国会に送り 私たちの声を直接届けよう

第23回定期大会あいさつ（抜粋）

JAM会長 安河内賢弘

【機関紙JAM・2021年8月25日発行 第271号】

大会や中央委員会などの挨拶で、政権批判をすることは避けてきましたが、パンデミック禍における政府与党の無為無策は極めて遺憾であり、政権批判せざるを得ません。私たちの命と健康に対して、ささやかな生活に対して、かけがえのない家族に対して、政府与党は何故ここまで冷淡になれるのかと憤りを禁じえない。同時に、私たち自身が「冷淡な傍観者」となって、パンデミック禍において困窮する働く仲間や女性、外国人、学生などに対して無関心になっていないか、自らに問い直さなければならぬと思います。すべての働く仲間のための運動を強化していかなければなりません。

デジタルトランスフォーメーションやグリーンディールなど、新しいカタカナが大きな話題となっています。繰り返し申しておりますが、技術革新は私たちが反対しようがしまいが、着実に進んでまいります。であるならば、私たちはこの技術革新を前向きにとらえながら、その先にある人間の労働が中心にある働き方、そして誰一人取り残されない社会の構築をめざしていかなければなりません。

私たちが求める新しい社会を構成する重要な要素として政治と企業があります。私たちの雇用を守り、賃金を守るためには社会と企業と政治のすべてに労働組合が関与していかなければなりません。パンデミック後の新しい社会を人間の労働を中心に据えた社会とするために、今ほど労働組合の政治力が求められる時代はありません。

私たちは、「村田きょうこ」という大変すばらしい候補者を推薦することができました。なんとしても「村田きょうこ」を国会に送り、私たちの声を直接国会に届けなければなりません。パンデミック禍の中、難しい政策実現活動になりますが、私たちJAMの底力を見せていただきたい。

JAM運動には大きく分類して四つの運動があると私は考えています。一つは集团的労使関係の下で職場組合員の雇用と労働条件を守る、あるいは共済運動やろうきん運動をはじめとした助け合いの活動で暮らしを守る運動など職場に根差した運動。二つ目は、非正規労働者や外国人労働者などの未組織労働者をはじめ、目の前で困っている人たちを助け、最終的には集团的労使関係の下で守っていく運動。三つ目には現場で働く仲間の声を、政治や経済界に届け私たちの暮らしを改善していく運動。そして四つ目には署名活動やデモ行進、SNSなど様々なキャンペーンを通じて社会を変えていく運動です。これらの運動はどの運動が重要であるというような優劣をつけるものではなく、どの運動も重要であり、それぞれが複雑に連携しながら存在しています。より多くの仲間の皆さんと思いを共有し運動を活性化させていくことで、より魅力的なJAMに生まれ変わることができます。そして、その先に、JAMに魅了される新しい仲間を発掘することによって組織拡大が実現します。私が今話をしている内容は当たり前のことです。しかし、その当たり前のことを言語化することに大きな意味があります。JAM運動20年の歴史の中で、もっとやりたかったことは何か、やりたくてもやれなかったことは何かを言語化して前に進むことが、私たちが本大会で提起する変革です。この変革の取り組みに全組合員が参加し、対話を通じて新しい時代に相応しいJAM運動を確立していただきますようお願いいたします。

ミャンマーの仲間との連帯も重要な課題です。報道は減りましたが、何一つ解決してはいません。私たちJAMが声を上げ続けることで、国際世論を動かし、ミャンマーに平和と民主主義を確立しましょう。

共に頑張りましょう。